

千の注なども追加して作成してみました。また、その過程で見つけた「西堀カルタ」(1986、カルタの文言は関西モチベーション研究会が西堀先生との共同作業で選定)もお年玉とします。ぜひ、この総目次を参考に、図書館などで関心のあるところからでも読んでいただければと願っています(とはいっても、筆者自身、とりわけ今西先生の学問的なところは有名な「棲み分け(habitat segregation)」原理を聞きかじった程度で、よくは理解していません)。両先生の雪山を含む登山や、西堀第一次南極越冬隊長としての偉業など、過酷な探検に果敢に挑戦されたお話などに、とても心打たれ励まされること間違いありません。



両先生について、それぞれこの1冊ということであれば、

- ・本田靖春(1933–2004)「**評伝 今西錦司**」(山と溪谷社 1992、岩波現代文庫 2012、講談社電子版 2013、岩波版の解説は河合雅雄(1924–2021)京大名誉教授)²
- ・「**西堀榮三郎選集 1巻**」(悠々社 1991)中の自伝(本人でなく編者により編集されたもの)²

は、読み出したら豪快・痛快なことも満載——止まらないと思います。

また、西堀家由来の滋賀県東近江市に、

- ・「**西堀榮三郎記念 探検の殿堂**」(次頁に写真) <https://e-omi-muse.com/tanken-n/>

があります。同館には、東京都大田区鶉の木1-20-1 に2013年まであった西堀邸

(一般社団法人 第一次南極越冬隊長 西堀榮三郎邸 人生にロマンを求める会、

<http://www.jare.org/Repo10/inf5.cgi?mode=main&cno=19> <https://asa-ing.co.jp/h/sanpo-hi/sanpo-h1202.html>)

² 今西先生の評伝が、「孤高のジャーナリスト」とも呼ばれた本田氏(山も生物学も専門ではないものの)によって遺されたことは貴重だと思います。後藤正治(1946–)氏も本田氏を「含羞を帯びた男気、あるいは俠気」とも表現し、「**拗(す)ね者たらん 本田靖春 人と作品**」(講談社 2018)中では「**第一四章 放牧の自由人——『評伝 今西錦司』**」を取り上げています。本田氏は、今西先生のことを「この世を思いのままに生きた人物が現にいたという事実の重みであり、その貴重さである」、「偉大であった自由人、今西錦司氏に対して、尊敬と親愛の念を捧げたいと思う」などと述べていますが、河合先生の解説にもあるように「今西さんの千五百山登山に関する著者(=本田氏)の批判はまことに手厳しい」です。しかし、この点は本田氏の面目躍如というところでもあるように筆者は感じました。なお、京都大学総合博物館編「**フォト・ドキュメント 今西錦司**」(紀伊國屋書店 2002)は貴重な写真中心の本です。

一方、西堀先生については、財団法人 日本企画協会 関西支部 モチベーション研究会〔委員長：近藤良夫 京大名誉教授・元山岳部(1924–2011)〕がまとめた「**生誕百年記念 西堀榮三郎資料集**」(2003、第1分冊 pp.1-538、第2分冊 pp.539-1042)も貴重な資料ですが、閲覧できる場所が限られるのが難点です。なお、西堀先生の原子力発電に関する期待については、日本原子力研究所理事に就任された1958年当時(原子力発電の黎明期)の背景から理解する必要があり、2011年に福島原発事故を経験した現代とは受け止め方が異なると思います。

さらに、加藤秀俊(1930–) + 小松左京(1931–2011)「**学問の世界 碩学に聞く 上**」(講談社現代新書 1978)には、今西先生と西堀先生をはじめ、桑原武夫(1904–1988)先生、貝塚茂樹(1904–1987)先生、篠田統(1899–1978)先生との座談もおさめられています。

の居間なども再現されていて、カルタを含めいろいろなグッズも入手できます。なお、同館では現在「今西錦司生誕120周年記念△展」も引き続き開催中で、さらに西堀先生の生誕120年に向けて、記念展「技術に携わる者はみな、かくありたし」(仮称)と各種イベントも準備中とのことです。



三高・京大山岳部や学問を通しての人脈は膨大で限られた紙面では紹介できませんが、いくぶん私的な面での関係の方々についてだけお伝えしましょう。まず一中では、1911年から森外三郎³(1865–1936)氏が校長となって「自由」の精神を吹き込まれました(1922年には三高の校長)。このため、森校長は京大の「自由の学風」の原点の一人ともいえるでしょう。さらに、西堀先生が東京電気(マツダランプ、現東芝)に就職するきっかけとなった森二郎氏は森校長の次男、また西堀先生の美保子夫人は今西先生の2番目の妹⁴でした。一方、今西先生の園子夫人は今西先生の3番目の妹の友人で、その父 鹿子木(かのこぎ)孟郎³(1874–1941)氏は有名な洋画家です。

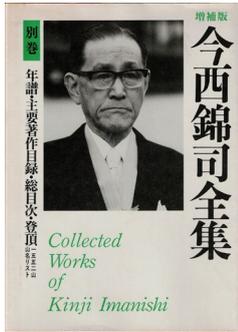


謝辞 西堀先生に関して、西堀榮三郎記念 探検の殿堂の角川(すみかわ)咲江館長と日本規格協会の田中将也氏にたいへんお世話になりました。ここに記して謝意を表します。なお、両先生の登山や探検に関しては以下のウェブサイトなども参考になることを付記します。

- ・ Academic Alpine Club of Kyoto 京都大学学士山岳会 <https://www.aack.info/index-ja.html>
- ・ 南極OB会 <http://www.jare.org/index.html>
- ・ 国立極地研究所 <https://www.nipr.ac.jp/antarctic/>

³ 森外三郎氏も鹿子木孟郎氏も、一時期、三重県第一尋常中学校(現：津高校)の教諭だったという共通性があります。

⁴ 美保子夫人が「結婚してからも、西堀に聞いたことがあるんですよ。あなた今西の兄と私とどっちが好きなの」と問い詰めた、というほど両先生は親しかったそうです。



『増補版 今西錦司全集』（講談社、1993–1994）総目次

- | | |
|---------------------|------------------------------------|
| 第一巻 生物の世界・山岳省察・山と探検 | 第八巻 日本山岳研究 |
| 第二巻 草原行・遊牧論そのほか | 第九巻 私の自然観・自然と山と・そこに山がある |
| 第三巻 ヒマラヤを語る・カラコラム | 第十巻 私の進化論・私の履歴書 |
| 第四巻 生物社会の論理 | 第十一巻 自然と進化・人類の周辺 |
| 第五巻 人間以前の社会・人間社会の形成 | 第十二巻 ダーウィン論・主体性の進化論 |
| 第六巻 御崎馬の社会調査・村と人間 | 第十三巻 自然学の提唱・自然学の展開 |
| 第七巻 ニホンザルの自然社会・ゴリラ | 別巻 年譜・主要著作目録・総目次・
登頂1552山 山名リスト |

第一巻 生物の世界・山岳省察・山と探検

『増補版 今西錦司全集』の刊行にあたって 梅悼忠夫
全集の刊行にあたって 今西錦司

生物の世界（1941）

- 序
- 一 相似と相異
- 二 構造について
- 三 環境について
- 四 社会について
- 五 歴史について

山岳省察（1940）

- 自序
- 初登山に寄す
- 飛驒の四日
- 登山の実証的一断面
- 短スキー論
- 山地スキー術私見
- 北海道の冬を訪ねて
- 学生登山界にみる冬山の傾向
- 白頭山遠征について
- ヒマラヤ遠征とわが登山界の現状
- ヒマラヤ登山の目標
- ヒマラヤ登山の意義
- 征頂祝福
- 山城三十山
- 山に与うる時代
- 山への作法
- 春の山に登る
- 樺太の山の思い出
- 高山の昆虫の話
- 雪崩
- 積雪雑記
- 冬山雑記
- 冬と動物の生活
- 白頭山登山雑記
- 白頭山動物の記
- 私のスキー、私の登山
- 山・登山・登山者の相互関係
- 北山・一つの登山発達史
- 回顧と展望

山と探検（1950）

- 山
- 魚釣り
- スキー教師
- 南島登高記——ポナペ島のナナラウト山——
- 探検の前夜

- 登山と探検
- 大興安嶺釣日記
- 釣り——自叙伝風に
- 山の数をかぞえる
- 前歴
- 駄獣がほしい
- 季節漫筆
- 北山小屋
- 釣りの一日
- エベレスト
- エベレスト追放
- 極地法
- 釣人よいづくにゆく
- たき火の練習
- 佐伯宗作
- 田中さん
- あとがき

解題 梅悼忠夫

索引（巻末）

月報（付録）

- 今西さんのこと 四手井綱英
- 北山・白頭山・ヒマラヤ 奥平定世
- 処女作の頃 下村寅太郎
- 門前払い 高崎浩幸

第二巻 草原行・遊牧論そのほか

『増補版 今西錦司全集』の刊行にあたって 梅悼忠夫

「内蒙古の生物学的調査」から

序説（1939）

森林樹種の分布（1940）

草原行（1947）

- 北京
- 張家口
- 漢人地帯
- 蒙古人地帯
- 蒙古人地帯——つづき
- あとがき

遊牧論そのほか（1948）

- 草原の自然と生活
- 遊牧論
- 遊牧論
- 遊牧論への注釈

砂丘越え

肅親王牧地にて

砂丘越え
タムチン・タラ
チャハル印象記
張家口落ち

動物記

犬
狼
あとがき

『人類の誕生』から (1968)

農耕はじまる

雑食性の素質十分
得やすいものからとり入れる
文明は森林の外ではじまる
熱帯降雨林と植物性食物
火食のあとさき
世界でいちばん古い農耕
農耕発生の単源説と多源説
植物が栽培される機会
照葉樹林生活者の場合
砂漠オアシス地帯の景観
サバンナでの火食
一年生禾本(かぼん=イネ)科植物との結びつき
穀物栽培はこうしてはじまる
ここでは灌漑が必要である
家畜をともなった農耕

牧畜はじまる

イヌが最初の家畜である
牧畜、第三の生活様式
文明人の身勝手な三段階説
トナカイかヒツジか
人間とヒツジとのなれあい
ヒツジとヤギのはち合わせ
保護者と被保護者の関係
牧畜による狩猟生活者の救済
もうひとつのなれあい説
餌さづけは家畜化にいたる道程の一步
ウマとラクダと
左うちわの生活へ
群れ全体を帰属させてやろう
幼獣捕獲説は賛成しかねる
群れをつくらぬイノシシ
イヌとブタの相似点
アフリカを考える

文明への序曲

ここにひとつの錯覚がある
植物が人間に歩みよる
地中海農耕文化の完成
たくわえは文明の母なり
食糧余剰の集中化
そして分業がはじまる
農耕民は自衛する
城壁を設け、兵を養う
超世帯的世帯の成立
横から縦のつながりへ
国家の原型となるもの
国威発揚のために
ムギなればこそ可能だった

ぜいたくの文化の芽生え
人類の「歴史」のはじまり

解題 梅棹忠夫

索引(巻末)

月報(付録)

大興安嶺の頃 藤田和夫

霊長類の化石を求めて 池田次郎

今西さん・その学者的野人像 近藤四郎

今西錦司さんの山 田口二郎

第三巻 ヒマラヤを語る・カラコラム

『増補版 今西錦司全集』の刊行にあたって 梅棹忠夫

ヒマラヤを語る(1954)

序

ヒマラヤ登るべし

出発の言葉

カトマンズ出発まで

ヒマラヤ入り

印象を語る

課題に答える

科学ノート

続科学ノート

エベレストは登られた

カラコラム——探検の記録——(1956)

カラコラムへ

フンザとナガール

ヒスパー・パス

バルトロ

スコロ・ラ越え

インダス河畔にて

あの森林を確かめよ

スノー・トラウト

ギルギットの鱒(マス)釣り

北と南——垂直分布帯の成因をめぐって——(1942)

山の生態学(1967)

解題 桑原武夫

索引(巻末)

月報(付録)

夢と計画 西堀栄三郎

今西さんとの出会い 中尾佐助

無題 増田義郎

晩年の今西先生 斎藤惇生

第四巻 生物社会の論理

『増補版 今西錦司全集』の刊行にあたって 梅棹忠夫

生物社会の論理(1949)

第一版への序

第一章 学史的素描

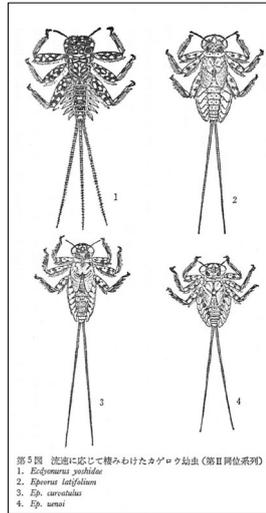
分類学のはたした功績

生物的自然の記述

生物地理学の発展と衰退

生物分布帯派

類型主義に対する態度
 地域主義の切り札＝地域指標種
 生態学の先駆者
 植物生態学の擡（たい）頭
 植物共同体の単位
 植物共同体の体系化
 動物生態学の追隨
 動物共同体の単位



↑ (p. 78より)

第二章 新らしき出発

種の具体的なあり方
 生物的自然の分析
 生活形における植物と動物
 共同体と社会
 生活の場
 棲みわけ原理
 カゲロウ幼虫の生活形
 生活形の進化——ダイバーゼンスとコンバーゼンス
 同位社会
 同位社会にみる二系列
 日本北アルプスの垂直分布帯
 記述における縮尺度

第三章 再構成

棲みわけ原理の拡張
 複合同位社会
 高次の複合同位社会
 植物社会への適用
 内蒙古の草本社会
 順位のある同位社会の複合
 順位のない同位社会の複合
 階級社会
 階級社会の発達と土地価
 階級社会の系列
 動物における階級
 大興安嶺のシカ社会
 土地評価の変革

第四章 体系づけ

動物における遷移
 部分社会における極相
 モデルからはなれた場合
 遷移概念に対する限定
 ポナペ島のマングローブ社会
 単極相説と多極相説
 自然秩序の裏づけ
 社会の安定さと不安定さ
 生態系
 第I生態系と第II生態系
 東部アジアの第I生態系
 大動物による生態系の修正

再版へのあとがき

「論理」をめぐる諸論文

分布の研究方法について (1933)
 生物群衆と生物社会 (1936)
 群衆分類と群聚分析——群聚の型と形とにかんする一考察 (1937)
 生物地理学とその学派 (1947)
 F・E・クレメンツ——その学説の批判 (1950)
 生活共同体の認め方 (1949)

内蒙古草原の類型づけ——一九四四年までに得られた知識の整理 (1951)
 内蒙古草原の地理的位置づけ——とくに軽草原を中心として (1951)
 思索社版へのあとがき

解題 森下正明

索引 (巻末)

月報 (付録)

今西生態学との出会い 沼田 真

今西生物学の危機? 筑波常治

生物の歴史 木原 均

アフリカ研究会のころ 掛谷 誠

第五卷 人間以前の社会・人間社会の形成

『増補版 今西錦司全集』の刊行にあたって 梅悼忠夫

人間以前の社会 (1951)

序

第一章 人間社会に近接した社会

——研究はどのようにして進められたか——

第二章 人間社会に近接した社会 (つづき)

——サルの社会——

第三章 人間社会から遠い社会

——一般下級動物の社会——

第四章 人間以前の家族

——昆虫の社会に家族が現われるまで——

第五章 人間以前の家族 (つづき)

——哺乳類の社会に人間の家族が現われるまで——

付記

生物社会と人間社会

動物の社会 (1940)

動物学者の社会学 (1949)

人間以前と人間以後 (1952)

一 まえがき

二 グループ・セオリー

三 最初の人類

四 社会進化の問題

五 あとがき

生物社会と人間社会 (1958)

一 問題をどう取り扱えばよいか

二 ウォレスの立場

三 はじめに社会があった

四 人間社会の進化は共同体の進化である

社会と個体・社会進化と個体進化 (1959)

人間家族の起原 (1961)

——プライマトロジーの立場から——

人間社会の形成 (1966)

はしがき

第一章 群れ社会の成立まで

一 社会はすべての生物に存在する

二 単独生活者の社会と群れ生活者の社会

三 子もち生活者の立場

第二章 サルの社会・類人猿の社会

一 社会進化と個体進化

二 ニホンザルの社会

三 類人猿の社会

第三章 人間社会のはじまり

一 類人猿の社会と人間の社会のつながり

二 群れ生活の危機とその克服

三 人間家族の起原

第四章 人間社会の成立

一 自然の中なる人間社会

二 自然からの独立前後

三 重層化と文明化

四 都市の問題

コメントと答え

グロッサリー

解題 上山春平

索引 (巻末)

月報 (付録)

今西さんのカラフルな世界 富川盛道

岐阜大学長今西錦司 館 正知

「動物の社会……」の頃 日高敏隆

若いひとに目をかけた今西先生 福井勝義

第六巻 御崎馬の社会調査・村と人間

『増補版 今西錦司全集』の刊行にあたって 梅棹忠夫

常緑広葉樹林

常緑広葉樹林 (1949)

南のはての自然村——屋久島印象記 (1949)

屋久島の垂直分布帯 (1949)

御崎 (みさき) 馬の社会調査

御崎馬の社会調査

報告第一——ブレリナリー・サーベいの覚え書きと問題の提出 (1949)

報告第二——冬営地における御崎馬 (1953)

報告第三——いままでに試みた調査の要約 (1950)

報告第四——かれらの社会組織は守られたか—4匹の移植実験 (1951)

半野生馬の社会生活——Specia, specionおよびoikia, oikionの提唱 (1950)

都井岬のウマ

都井岬のウマ (1955)

第一章 半野生の生活

第二章 戸籍簿づくり

第三章 顔ぶれは変わってゆく

第四章 〈ムサン〉故郷にかえる

あとがき

『日本動物記』の誕生

『日本動物記』の再刊によせて

村と人間 (1952)

序

第一章 村

第二章 部落

第三章 生活水準

第四章 グループ

第五章 人間

あとがき

解題 伊谷純一郎

索引 (巻末)

月報 (付録)

今西先生と私 河合雅雄

わたしにとっての「今西錦司の世界」 小原秀雄

今西先生と私 徳田喜三郎

いくつかの出会い 谷 泰

第七巻 ニホンザルの自然社会・ゴリラ

『増補版 今西錦司全集』の刊行にあたって 梅棹忠夫

ニホンザルの自然社会

人間性の進化 (1952)

ニホンザルの自然社会 (1951)

ニホンザルの行動と二因子学習説 (1957)

霊長類研究グループの立場——ニホンザル研究の跡づけ (1957)

ニホンザル研究の現状と課題——とくにアイデンティフィケーションの問題について (1957)

トリ・サル・人間——アイデンティフィケーションを支える一般理論は可能だろうか (1960)

ニホンザル——その社会における個体 (1964)

未成熟期の社会環境が将来の順位に及ぼす影響 (1972)

日本人による霊長類の野外研究——その二〇年の回顧と将来への展望 (1970)

ゴリラ

アフリカ、そしてゴリラ (1959)

ゴリラ (1960)

ルエンゾリ——月の山 (1960)

アフリカ研究序説

アフリカ研究序説' (1968)

解題 伊谷純一郎

索引 (巻末)

月報 (付録)

今西さんと「内臓はりきり型」 藤岡喜愛

二つの学会 藤枝 晃

「ドクをくらわばサラまで」 和崎洋一

今西先生について 西田利貞

第八巻 日本山岳研究

『増補版 今西錦司全集』の刊行にあたって 梅棹忠夫

自序

雪崩の見方 (1931)

風成雪とその雪崩 (1933)

劔沢の万年雪 (1929)

日本アルプスの雪線 (1933)

日本北アルプスの森林限界線 (1935)

日本アルプスの垂直分布帯 (1937)

溪流のヒラタカゲロウ (1969)

イワナとヤマメ (1951)

イワナ属 (1967)

四十年の回顧 (1969)

解題 吉良竜夫

索引 (巻末)

月報 (付録)

山と学問 加納一郎

氷河生態調査の構想 樋口敬二

今西さんと私 坂上昭一

自然学事始め 渡辺兵力

第九巻 私の自然観・自然と山と・そこに山がある

『増補版 今西錦司全集』の刊行にあたって 梅悼忠夫

カゲロウ (1945)

カゲロウ
その位置づけ
カゲロウの四季

私の自然観 (1966)

私の自然観
山山登り
なぜ山に登るか
好きな山
ふるさとの山の杉林
比良山
山で出会ったケモノの話
ピッケルと飯盒 (ごう)
よい地図・よいガイドブック
ヒマラヤの雪男
異郷
山と遭難

探検

探検十話
探検について
ノンフィクションと探検
私の著作
わが心のふるさと——コンロン山
定年二題

溪流

ヤマメ釣り
ヤマメを絶滅から守りましょう

季節

冬は南国
五月の山野
虫の音
季節の感覚
記憶喪失

アフリカ

アフリカ
前線の日本人
セレンゲッティ
アフリカで考えたこと
南西アフリカ
南アフリカの白人
南アフリカの黒人
未開と文明
アフリカの潜在力

文化と進化

文化と進化

あとがき

自然と山と (1971)

自然と山と

自然と山と
山
北山しぐれ
地元のヤブ山
岩登り
転機
役に立った本

回想

話し上手

新年

常さんをおもう

十二支登山のこと

エクスペディション・スタイル

わが道

わが道

憂うつな季節

食生活第一主義

美人

自然の挽歌

もみじ

雪

自然

自然と人間

自然の挽歌

博物館と自然

動物と人間

溪流

原始生活への誘い

ソフィスティケートされた未開人

アマゴとマスのあいだ

私はシラメをこう考える

人間のしていること

大望

人間への提言

戦争

虫がおさまらない

国家

避けられぬ業

国民投票

尊厳の問題

日本人のアジア観

運命

くじ

岐路に立つ人類

あとがき

そこに山がある (1973)

そこに山がある

自然

鯉節

実現しなかった話

ある日の北山

自然と風景

山との対話

山と自然保護

庭の樹木

風景の死

炭焼きを継ぐもの

学問の周辺

教育とはなにか

哲学のことども

文化人類学の責任

人類

ある未来

生物レベルでの思考

一喜一憂

人類未来の夢

あとがき

解題 吉良竜夫
索引 (巻末)
月報 (付録)
今西錦司の行き方 貝塚茂樹
書信にみる「今西錦司語録集」 安江安宣
今西さんとのつきあい 岩田久二雄
ある日の今西錦司先生 川村俊蔵

第十巻 私の進化論・私の履歴書

『増補版 今西錦司全集』の刊行にあたって 梅悼忠夫

私の進化論
生物社会と人間社会 (1967)
人類の進化 (1968)
正統派進化論への反逆 (1964)
ダーウィン、その進化論と私の進化論 (1967)
ダーウィンの生涯
進化論の形成過程
『種の起原』以後
ダーウィン以後の進化論
進化論はどこまで完成しているか
丘浅次郎の進化論 (1968)
豊かな社会と貧しい社会 (1970)

進化とはなにか
進化とはなにか (1974)
パラントロパスの行方 (1970)
人類は滅びるか (1970)
進化史からみたオスの明暗 (1973)
人類の発端と未来 (1974)
一、人類とその社会の発端
二、人類社会の展開とその未来
『人類の進化史』へのあとがき (1974)

私の進化論の生いたち (1975)
私の進化論の生いたち——そしてそのもっとも新しい展開まで

人類学への回顧と展望 (1974)
人類学への回顧と展望

私の履歴書 (1973. 1. 1-1. 31)
私の履歴書

解題 上山春平
全集刊行の完結にあたって 今西錦司
索引 (巻末)
月報 (付録)
魅力的リーダー・今西錦司 川喜田二郎
今西学の示唆するもの 小松左京
山・スキー・ヒト化石 水野祥太郎
逝去後のことなど 斎藤清明

第十一巻 自然と進化・人類の周辺

『増補版 今西錦司全集』の刊行にあたって 梅悼忠夫

自然と進化 (1978)
自然と進化
自然と進化 (一)
自然と進化 (二)

自然について
カムイエクウチカウシの記
私における登山の変遷
四等三角点
地図の整理法
老年的随想
自然の遊行者

回想
遠い昔のこと
交友のころ
蒙古・思い出すままに
宮地伝三郎
徳田御稔
岩田久二雄
断想

推薦のことはば
山本素石
推鹿のことはば——『日本山岳地図集成』(学研)
推煎のことはば——トインビー『図説・歴史の研究』(学研)
推鹿のことはば——『講座・比較文化』(研究社)
推薦のことはば——『ヒマラヤ・人と辺境』(白水社)
推鹿のことはば——『世界の探検記』(河出書房新社)
跋—西島護『玉音(正しくは、かんむりへん+音)』(山茶花社)

ホミニゼーション
私の進化論
私の霊長類学
南米のいざない
現実と夢——野外観察者に期待する
ホミニゼーション(その一)
ホミニゼーション(その二)
サルと人間——京都大学霊長類研究所創立十周年記念講演から
ある教育論
苦は楽の種
落第
現代教育の盲点
あとがき

人類の周辺 (1981)
人類の周辺
人類の周辺
二十一世紀人に期待する
個人か社会か
私の認識の方法
直観と自然
ある対話——直観をめぐって——
動物社会と人間社会
科学的合理主義をこえて
進化論さまざま
進化論余録
和魂洋才
一つの提案——個人プレイからチームプレイへ——
『世界の民族』の推薦のことはば

山と私の人生
山と私の人生
千山以後
諸君、大いに山に登るべし
桑原武夫と私
「ケルン」のころ
飯豊礼讃

山口県の山——一つの推薦文——
 メーテルリンク著『蜜蜂の生活』の推薦文
 五百沢智也著『鳥瞰図譜—日本アルプス』の序文
 「山」の復刻に寄せて
 「あしなか」の復刻に寄す
 『日本登山大系』の推薦文
 『山岳の世界』の推薦文
 感想
 自然の弁護
 取りこぼし
 肩づまり
 富士信仰
 日本の味・京の味
 雲水の時代
 記憶のなかから
 動物たちとの対話
 暑さを忘れる
 コブシの花
 教育と宗教
 子供と環境——教育論として——
 宗教について
 あとがき

解題 伊谷純一郎
 索引(巻末)
 月報(付録)

今西先生のこと 加藤秀俊
 今西先生との出会い 田中二郎
 組織力とリーダーシップ 加納隆至
 昆虫学研究室のころ 小田村進二

第十二巻 ダーウィン論・主体性の進化論

『増補版 今西錦司全集』の刊行にあたって 梅棹忠夫

ダーウィン論——土着思想からのレジスタンス——(1977)
 第一章 ダーウィンとのかかわり
 第二章 ダーウィニアン・ドクトリン
 第三章 ドクトリンの崩壊
 第四章 自然淘汰を否定したところは同じだが
 第五章 種は変種から生じたか
 第六章 優占種に変種が多く生まれるか
 第七章 ダーウィンとラマルク
 第八章 環境はどのように取りあげられたか
 第九章 ふたたび大進化の舞台へ
 第十章 ダーウィンとウォレス
 第十一章 むすび
 あとがき
 グロッサリー

主体性の進化論(1980)

第一章 進化論の原流——ラマルクとダーウィン
 第二章 ダーウィン以外の進化論 その一——隔離説
 第三章 ダーウィン以外の進化論 その二——定向
 進化説
 第四章 人類の進化——応用問題として
 あとがき
 真意はいずれに——『進化論-東と西』あとがきにかえて(1978)
 『チンパンジー記』序(1977)
 霊長類社会の諸問題(1976)

解題 上山春平

索引(巻末)
 月報(付録)
 帰って来るエキザイル 河合隼雄
 今西先生との縁 山口昌男
 風景学の提唱 米山俊直
 仏・お経・お文 川勝平太

第十三巻 自然学の提唱・自然学の展開

『増補版 今西錦司全集』の刊行にあたって 梅棹忠夫

自然学の提唱(1984)

自然学に向かって
 『今西自然学』について
 自然問答
 自然をどう見るか
 進化論のルーツ——アンティセレクトシオニズムの立場から

カゲロウ幼虫から自然学へ
 自然学の提唱——進化論研究の締めくくりとして——
 現象と原理
 天動説の進化論
 わが学問について
 私の学問観

進化・自然・人間

進化史からみたオスの明暗
 家族起原論ノート(1)
 家族起原論ノート(2)
 自然にたいして
 D・アテンポロー著『Life on Earth(地球の生きものたち)』
 の推薦文

曼珠沙華
 京の仕出屋

湖国の味
 まむし
 好ききらい
 小林さんと私
 私の一冊
 一つのすすめ
 リーダー論
 藤岡知夫著『日本産蝶類大図鑑』の推薦文

山

桑原良敏著『西中国山地』に寄す
 日本の山と私
 名山考
 『日本の名山』の監修の言葉——山たちとの再見を楽しむ

『ザ・ヒマラヤ』の序文
 千三百山の『しおり』の序
 「一四〇〇山のしおり」刊行の言葉

老登山家は語る

高齢に挑む
 山上の教育

あとがき

自然学の展開(1987)

自然学の展開
 混合樹林考
 「自然学」の提唱に寄せて——二つ目の自画像——
 自然学に向かって
 自然学へ至る道——自然の全体像——直観の思想
 生態学と自然学とのあいだ

「自然学」への到達
『生物の世界』への回帰
自然学の一つの展開——odum生態学に寄せて——
自然学から見たわが国の自然——生態学から生物地理学
への復帰——

小田柿進二著『文明のなかの生物社会』の序・生物社会
学のことども

場の共有から共感へ
プロト・アイデンティティ論
群れ生活者たち

進化論の展開
進化論の現状
カゲロウから進化論まで

山
山との対話
山名は復旧できるか
正しい山名を守るものは誰れなのか
北山百山に寄せて
湧谷山か丁子山か
三十五年まへの取立山の遭難をおもう
わが山の美学わが地図の美学——日本千五百山登頂を
果して——

山はぼくより偉大だった

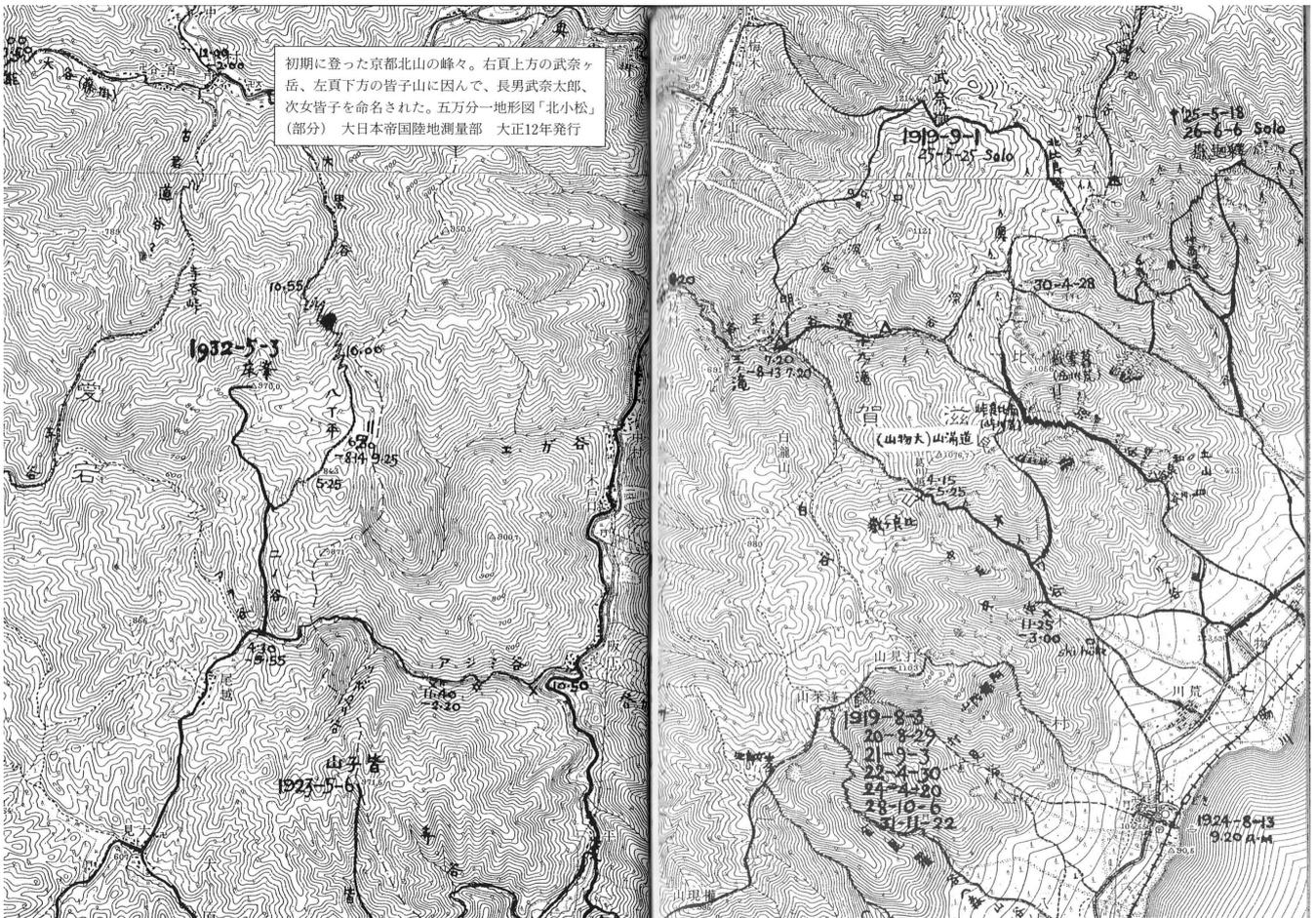
マンモスの牙
万年雪問答
そこはかとなき思い出
マンモスの牙——カルチュアギャップは解消しうるか——

回想——岐阜大学学長のころ——
リチャード・リーキー著『人類の起源』監修のことは
中西悟堂の死を悼む
市井の生物学
世界宗教の出現
あとがき

解題 川喜田二郎
索引(巻末)
月報(付録)
立つべくして立つ 岩田慶治
孤高の人 米本昌平
意識のあり方 日野啓三
万物一体の思想 山田慶児

別巻 年譜・主要著作目録・総目次・登頂1552山
山名リスト

『増補版 今西錦司全集』の刊行にあたって 梅棹忠夫
今西錦司年譜
主要著作目録
『増補版 今西錦司全集』総目次
『増補版 今西錦司全集』の完結にあたって 梅棹忠夫
登頂1552山 山名リスト
月報(付録)
リーダーとフォロワー 伊谷純一郎
父、今西錦司 今西武奈太郎



「別巻 登頂1552山 山名リスト」 pp. 60-61より

枠内の注釈： 初期に登った京都北山の峰々。右頁上方の武奈ヶ岳、左頁下方の皆子山に因んで、長男武奈太郎、次女皆子を命名された。五万分之一地図「北小松」(部分) 大日本帝国陸地測量部 大正12年発行



西堀榮三郎選集（悠々社、1991）総目次

- 1巻 人生は探検なり 西堀榮三郎自伝
 2巻 未知なる山・未知なる極地
 3巻 技術の想像力と品質管理
 別巻 人生にロマンを求めて 西堀榮三郎追悼

1巻 人生は探検なり 西堀榮三郎自伝

刊行のことば——人間・西堀榮三郎

序章

- 母の像（1985）
 高等小使になるのかい？（1985）
 兄からの贈りもの（1986）
 息子との山登り（1971）

I 自伝

- 山そして友との出会い
 自然探究への旅立ち
 人は経験するために生れてきた
 負けず嫌い
 近江商人の血
 山登り事始め
 比叡の山へ向けて飛ぶ熱気球
 初めての旅
 心に焼きついた白瀬中尉の「南極探検報告会」
 化学への興味
 道具をつうじて自然に親しむ
 商人の祭
 押し寄せてきた文明の波
 山城三〇山跋涉（ばっしょう）と技術への興味
 今四錦司との出会い
 山に襲われる
 北アルプス初見参
 「山城三〇山」完登計画
 スキー事始め
 宇宙への興味
 学者から技術者へ宗旨替え
 浪人時代
 南アルプス縦走
 元祖カミナリ族
 自由主義のもとで
 ストライキでオートバイが活躍
 アインシュタインとの出会い
 楽しかりし三高時代
 薬師岳・金作谷（きんさくだに）を下る
 関温泉・第一回スキー講習会
 ミクロネシア旅行
 三高山岳部創設と立山スキー登山
 趣味か仕事か、大学進学への悩み
 積雪期白根三山初登
 大学生活と登山
 黒部川東沢合宿、黒岳・赤牛岳・野口五郎岳積雪期
 初登頂
 理詰めと直感
 フレンドシック
 研究と山と
 研究に没頭
 趣味と研究の矛盾に悩む

- 一滴の石油合成に成功
 手づくりの実験装置
 分子線の研究
 爆発した実験装置
 北白川の新婚家庭
 我輩氏、現わる
 研究者から技術者へ
 ヒマラヤをめざして
 京都学士山岳会の創設
 富士山極地法登山
 樺太探検
 白頭山遠征
 技術に生きる
 技術の現場にて
 ラングミュア博士のように
 企業での悩み
 不良真空管への挑戦
 アメリカ留学
 「束芝」の軍管理化
 初の純日本製真空管「ソラ」の開発に成功
 研究隣組
 終戦、そして日本科学技術連盟の創設
 日本学術会議設立のころ
 品質管理普及活動
 「品質本位」と「統計的品質管理」の違い
 織り子から学んだ品質管理
 「風合い」の数値化
 面接による問題解決
 マナスル登山許可の取りつけ
 学術探検再開への情熱
 ネパール政府の厚意
 日本山岳会への委譲とマナスル初登頂成功
 実現した南極越冬の夢
 越冬隊前史
 南極に行ったアメリカ人を訪ね歩く
 越冬を主張する
 氷の中の一年
 基地の生活
 南極大陸旅行
 新しい原子炉への情熱
 安全な原子炉をめざして
 南極で百科事典片手の猛勉強
 原研理事就任
 実現しなかった平均質炉
 原子力船「むつ」の建造
 日本の技術を高めるために
 住民との対話
 憧れのヒマラヤへ
 ヤルン・カン遠征隊長
 一〇年目の許可
 キャラバン
 ツェラムの生活
 ベースキャンプを訪ねる

計画の変更
 登頂と遭難
 失敗に学ぶ
 チョモランマ登山隊総隊長
 開かれたカーテン
 二つのルート
 チームワークの成果
 技術と大自然
 私をかりたててきたもの
 「技士道」への道
 水平線の彼方

II 友を語る

若き日の旧友たち (1968)
 ノッポとチビ・井街 謙
 生涯の友・今西錦司 (1980, 1974, 1968)
 人間性を吹きこんでくれた青春の友・桑原武夫 (1988)
 あたたかな友・渡辺 漸 (すずむ) (1985)

III 対 談

好きな道を行く 井上 靖+鈴木治雄+西堀榮三郎 (1985)
 リーダーの条件 今西錦司+西堀榮三郎 (1979)
 巨大なテクノロジスト 加藤秀俊+小松左京+西堀榮三郎 (1977)
 「ヤルンカン」をあやつる負けじ魂 鈴木健二十西堀榮三郎 (1985)
 氷惑星とノア洪水の謎 高橋 実+西堀榮三郎 (1985)
 新しいものに臆病な日本人 本田宗一郎+西堀榮三郎 (1979)

[解説に代えて]

西堀南極越冬隊長 桑原武夫 (1959)
 西堀榮三郎年譜
 あとがき
 写真提供者
 初出一覧

2巻 未知なる山・未知なる極地

刊行のことば——人間・西堀榮三郎

序 章

わがフロインド・ペルヒ (1925)
 私の自然観 (1984)
 雪の魅力 (1972)
 自然 (詩) (1962)

I 山と探検

わが探検の人生 (1967)
 未知なる山へ
 私のスキー事始め (1984)
 「雪山讃歌」を作詞したころ (1956)
 「山と探検」秘話 (1976, 1981)
 山行記
 西堀榮三郎登山概史 編集委員
 野呂川荒川谷北俣 (1926)
 積雪期白根三山初登頂 (1988)
 春の白根 多田政忠 (1926)
 北岳、間岳、仙丈岳スキー登山 渡辺漸 (1926)
 春の東沢 (1927)
 劔岳の東面 高橋健治 (1929)
 樺太探検 (1932)
 白頭山登山に成功して (1935)

白頭山・準備について (1935)
 スキー論
 登山用短スキー論 (1934)
 山スキーの杖の使い方 (1934)
 技術書を疑う (1934)
 冬山のスキー技術に関する討論 (1934)
 海外の山へ
 マナスル以前 (1965)
 ネパール紀行 (1950)
 ヒマラヤ遠征記 (1975)
 “陰を冒さず” 山に登る (1980)
 苦難乗り越えたチームワーク (1980)
 南極越冬
 国境なき大陸 (未発表)
 越冬隊長記 (1983. 3. 25-4. 7)

II 友を語る

ロマンの男・植村直己 (1984)
 より困難な山をもとめて・加藤保男 (1985)
 山のために生れてきたような男・加藤泰安
 南極第一次越冬隊とカラフト犬・北村泰一 (1982)
 七五歳でヒマラヤ単独行・佐藤テル (1980)
 「オケラ五世号」の快拳・多田雄幸 (1983)
 エベレストママさん・田部井淳子 (1982)
 情熱の人・藤木九三 (1982)
 ヤルン・カンに逝った・松田隆雄 (1976)
 関温泉での憧れの的・村井米子 (1989)

III 対 談

三高時代の思い出 今西錦司+西堀榮三郎 (1984-5)
 ヨットライフの楽しさ 小林則子+西堀榮三郎 (1983)
 地球は楽し! 多田雄幸+植村直己+西堀榮三郎 (1983)
 山を愛した年輪 服部謙太郎+西堀榮三郎 (1986)
 探検における機械と人間 樋口敬二十上田 豊+西堀榮三郎 (1972)

[解説] 西堀榮三郎における登山と探検 本多勝一、大内尚樹
 登山・探検年譜
 あとがき
 初出一覧
 写真提供者

3巻 技術の想像力と品質管理

刊行のことば——人間・西堀榮三郎

序 章

技術屋根性 (1965)
 科学技術の功罪 (1985)
 開発のための発想法 (1975)

I 技術の創造力と品質管理

科学・技術・人間
 西堀カルタ (い〜と) (1986)
 科学・技術と人間——その未来的展望 (1982)
 ホモ・サピエンスの“発展的解消” (1978)
 企業における創造性
 西堀カルタ (ち〜か) (1986)
 組織、一匹狼、そしてチーム (1975)
 西堀流企業運営術 (1965)
 中小企業論 (1966)
 「信頼による管理」にむけて (1978)

チームワークとリーダーシップ

- 西堀カルタ (よ～む) (1986)
 アムンゼンとスコット——リーダーの二つのタイプ (1987)
 リーダーシップの真髄 (1985)
 自主主義——チームワークの基本 (1981)
 参画的解決——これからの経営 (1970)

品質管理の真髄

- 西堀カルタ (う～ま) (1986)
 品質管理はいかにして行うか——企業の生脱性向上のために (1955)
 私のQCことはじめ (1983)
 性善説に立つ品質管理 (1983)
 レッテルを貼るな (1988)
 問題解決の二つの方法 (1987)
 品質管理は統計的手法で (1986)
 「検査」は選別ではない (1987)
 設計の品質への期待 (1985)
 これからの企業に望むこと——出来ばえの品質を (1987)
 「二項確率紙」について 原田明

研究開発の方法

- 西堀カルタ (け～ぎ) (1986)
 研究は知的分野の探検である (1988)
 研究と実用 (1961)
 研究開発の方法論 (1971)

原子力

- 西堀カルタ (ゆ～ん) (1986)
 原子力政策への緊急提言 (1979)
 核エネルギー協働システムの開発を (1987)

II 友を語る

- 「先見の明」の人・森川覺三 (1986)
 原子力研究所時代の菊池正士先生 (1975)
 「ワガハイ」と私・森 二郎 (1970)
 [補] カヌー「アメンボウ」の進水まで 武田和忠

III 対談

- 科学を役立てるのは技術だ 稲葉秀三+西堀榮三郎 (1979)
 ケチらず金を使うべし 小林宏治+西堀榮三郎 (1979)
 日本の品質管理の将来 唐津 一+H・サラソン+西堀榮三郎 (1984)
 涙のない男はリーダーたり得ない 平松守彦+西堀榮三郎 (1987)
 戦後、QCを始めた頃のこと W・E・デミング+西堀榮三郎 (1981)
 日本人の創造性 西澤潤一+西堀榮三郎 (1987)

[解説]

- 西堀流品質管理 唐津 一
 平均質炉と溶融塩炉——西堀先生が託した課題 上田隆三
 西堀先生と核エネルギー——来世紀世界のために 古川和男
 あとがき
 初出一徳
 写真提供者

別巻 人生にロマンを求めて 西堀榮三郎追悼

刊行のことば——人間・西堀榮三郎

序章 西堀さんにおける技術と冒険
 神話時代の英雄／「雪よ岩よ」／ペミカン／E・E・ニシ

ポリ／臨機応変／デミング賞／ネパール服で／南極のそりイヌたち／『南極越冬記』／溶融塩炉／アジテーター／トンネル計画／

I 人生にロマンを求めて 西堀榮三郎 (1986)

- 西堀話術の魅力 稲葉秀三
 エテ叔父さん 今西武奈太郎
 ロマンチストでスポーツマン 茅 伊登子
 夢とロマンに生きて 川喜田二郎 (1989)
 粘土に現われた西堀さん 北出照治
 西堀先生が残された宿題 向後元彦 (1989)
 四月十三日、「しらせ」の帰還 近藤良夫 (1989)
 旧友・西堀君の思い出 佐島敬愛 (1989)
 青年西堀榮三郎 佐藤愛子 (1979)
 「夜明けのこけっこになりなはれ」佐橋 慶
 「男装で入ったらエエ」篠原孝子
 温かい家庭・合理的精神・非権威主義 清水龍男
 西堀君の母校・京都一中 下村寅太郎
 かけがえのない勇氣 鈴木健二 (1985)
 いつでも「新鮮な出会い」田代 空
 創意工夫を生む真の人間観 谷沢永一 (1989)
 フランクリンの系統を引く哲学者 鶴見俊輔 (1988)
 山友だちの父親・西堀榮三郎 堂本暁子
 西堀流品質管理の原点・丹後峰山を訪ねて 那須美智
 「がっこにいちゃん」 西堀道雄
 ポリ・ヴィラと、蝗 (いなご) の唐煎り 針ヶ谷 忠
 西堀さんから知恵が湧く 樋口敬二 (1989)
 『五分の虫にも一寸の魂』 平澤 興 (1984)
 西堀さんと私 本多勝一 (1989)
 偉大なる弥次馬 間下長一
 「しっかりやるとるかね」 森田勇造
 南極からの祝電 大和鈴鹿
 パリのトラブル アルフレッド・ルコック
 西堀との思い出 西堀美保子 (夫人：今西錦司先生の妹)
 父の遺産 西堀岳夫⁵ (長男)
 いま懐かしい父へのコンプレックス 西堀富士夫⁵ (次男)
 下田の海で童心にかえった父 稲葉暁子 (次女)
 創造性を育む教育方針 西堀峯夫⁵ (三男)
 偉い、というよりかっこいい 西堀岳路⁵ (孫)

II 山へかりたてるもの 西堀榮三郎 (1986)

- 永遠のチャレンジャー 井上治郎
 極地に、山に、未知を探り続けた西堀さん 今西壽雄 (1989)
 西堀武勇伝 太田喜久雄
 京都における近代アルピニズムの曙 桑原武夫 (1988)
 医師として参加したヤルン・カン 斎藤惇生
 西堀流創造的生き方 斎藤清明
 ダブルプレストのにこやかな姿 斎藤健治 (1989)
 頼れるおじさま 佐藤テル
 日本登山界の大先輩を悼む 四手井網英 (1989)
 すり減ったピッケル 四手井靖彦 (1989)
 サバイバル・センター構想 田口二郎
 「平常心、平常心」 田部井淳子
 貫かれた純愛 土倉九三
 「石橋……」式発想法 藤平正夫
 ブータン——進行方向最前列 松井宣也
 燃やされた「退会届」 宮下秀樹 (1989)
 カカニのポリ・ヴィラ 宮原 巍
 十年目ごとの出会い——西堀さんと私 山田善二郎
 ヤルン・カンでの西堀先生 吉野照道

⁵ 今西先生のご家族と同様に、山にちなむお名前です。

III 南極越冬と涙 西堀榮三郎 (1967)
 古武士の風格 相沢英之
 真の「世界の人」 シデネ・エメリー
 常識を破る——西堀氏の真骨頂 北村泰一 (1989)
 N・Nカップリング 木下是雄
 昭和基地に届く「家族の声」 作間敏夫
 「宗谷」のブリッジで乾杯 田 英夫
 「純ちゃん岩」と科学研究委員会 中村純二
 「お化け大好きや」 西丸震哉
 果たせなかった約束 能勢 順
 探検メカニスト・西堀榮三郎 藤田和夫
 「やってみよう」 村越 望
 西堀先生と植村君 吉田 宏
 朗らかな科学者 和達清夫
 「役所流」対「未知への挑戦者流」 渡辺
 兵力 (1989)

IV 水平線に向かって 西堀榮三郎 (1986)
 「ヤルンカン」の思い出 伊藤良昌
 西堀先生の死、妻の死 大南勝彦
 果たせなかった海への恋 大山順彦
 西堀哲学伝導の場「ヤルンカン」 黒水恒男

V 品質管理の原点 西堀榮三郎 (1972)
 生産性運動の名アドバイザー 青木幹夫
 「宝の山じゃ」 池田信一
 先憂後楽、先楽後憂、共に人生 石井榮一
 『品質管理実施法』の頃 磯部邦夫
 西堀語録 伊奈正夫
 越冬隊長就任前夜 大津孝太郎
 先生は私の母船であった 大森弘一郎
 西堀先生にもらったホームラン 岡 茂男
 現場労働者の創造性をこそ 亀井一綱
 品質管理の先駆者 茅野 健
 データに語る 唐津 一
 「西堀教室」と日本規格協会 川村正信
 百発百中の品質管理 後藤正夫
 「西堀流」で理想的な会社づくりを 篠河 進
 「異質の協力」の重要性 清水祥一 (1989)
 新しいものを発見する科学者の目 田口玄一
 巨星遷移 武田和忠 (1989)
 感銘を受けたリーダーシップ 豊田章一郎
 西堀先生がミサワホームに託された夢 中村恵二
 談笑のうちに花開く心豊かな人生 難波捷吾
 「友情は天国であり、生命である」 西野嘉一郎

西堀先生の手形と足形 林 萬直
 一升ビンに生卵を詰める 原田 明
 QC界の巨頭 廣瀬浩一 (1983)
 未曾有の啓蒙家 藤井康男
 見届けてほしかった推理の正否 増山元三郎
 「もったいない」は、環境問題を解く鍵だ 三村啓一
 激励と助言 安川太郎
 品質管理の哲学者・西堀エテサン シドニー・ルビンスタ
 イン (1989)

VI 技術と科学 西堀榮三郎 (1976)
 「風船」の話、そして「西堀賞」創出の提言 飯沼和正
 技術開発と西堀先生 池田 豊
 経験が生む奇抜な発想 井深 大
 オートバイに乗せてくれた西堀先生 井街 仁
 石油は、隕石の衝突でできた！ 沖津文雄
 尽きぬ想い出のまにまに 小田切瑞穂
 記憶に残る西堀語録 小原正典
 「粉人生」の始まり 加瀬 薫 (1975)
 東芝時代の西堀さん 川村 肇 (1980)
 不思議な魅力の先生 佐々木 正
 耳に残る開西弁 水渡英二
 「俺はお前を信頼している」 那須昭一
 温情ある偉大な先輩 丹羽四郎
 「そりゃよかった、万歳や」納賀勤一
 南極の風力発電機 本田宗一郎
 西堀先生の遺言 松井 好
 「針の山の初登攀をする」 室 博
 「これは面白い」 若尾正昭

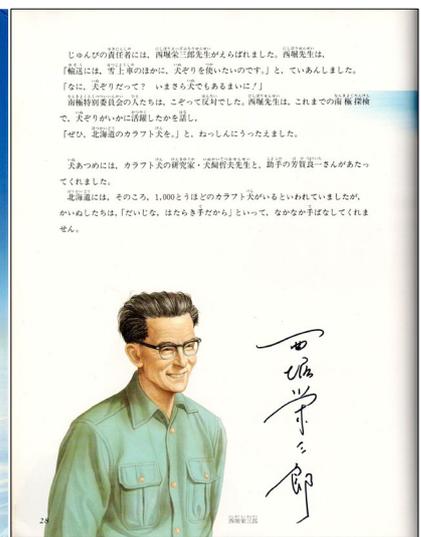
VII 安全な原子炉の開発をめざして 西堀榮三郎 (1979)
 原子力平和利用への開拓者精神 今西錦司 (1981)
 半均質炉から熔融塩炉へ 上田隆三
 身につまされた『百の論より一つの証拠』 佐々木元増
 特許をとった安全第一の「小型一回路熔融塩原子炉」 佐
 藤俊夫 (1989)
 「静かすぎる環境は研究によくない」 長山泰介
 トリウム熔融塩核エネルギー協働システムは二十一世紀
 の課題 古川和男
 深更の鶏鳴 松浦祥次郎
 「どや、進んだるか」 矢野淑郎

あとがき
 初出一覧
 写真提供者



←
 朝日新聞
 1957.1.25朝刊

→
 東京都新宿区の
 古書店で入手した
 「カラフト犬物語」
 (1982)
 (西堀先生のサイン
 がありました。167
 頁の感動的な絵本
 です。)





西堀カルタは日本規格協会の機関誌「標準化と品質管理」誌1986年1月号で紹介され、西堀榮三郎選集3巻にも、総目次に示しましたように、その内容が転載されています。これを、日本規格協会および西堀榮三郎記念 探検の殿堂のご厚意により、次頁以下に転載します。なお、絵は水谷たけ子氏によります。

西堀カルタ年表 2002.9.29.

(「生誕百年記念 西堀榮三郎資料集：第2分冊 p.761(2003)」より引用。なお、関連の資料には「カルタ」と「かるた」が混在していましたが、本稿では1986.1の初出に合わせて前者に統一しました。脚注⁶は筆者が追加しました。)

- 1974年 モチベーション研究会発足
- 1982年 西堀カルタ原案作りに着手
- 1986年 「標準化と品質管理」誌 (Vol.39 1986.1) に「西堀カルタ」を发表
- 1989年 西堀榮三郎博士 逝去
- 1996年 国際会議 (ICQ 1996 YOKOHAMA) で「西堀カルタ」の英語訳を完成し絵に色ぬりして、展示場の来館者に英語版 (NISHIBORI MAXIMS) を配布した。
- 1997年 オランダ国の古都デン・ボッシュで、西堀カルタ (NISHIBORI MAXIMS) について討議して、アンケートの回答を貰う。
- 1998年 西堀カルタ分科会発足。
日本経済新聞の春秋欄(1998.3.31)⁶ にカルタを用いた政治評がのる。
静岡県の桐陽高校で、西堀カルタ絵の復刻を完成し、数箇所て展示した。
「西堀カルタ」の韓国語訳と中国語訳が提出された。
第10回ことわざフォーラムで、「西堀カルタの魅力とその展開」を发表した。
「西堀カルタ」のインドネシア語訳が提出された。
- 1999年 西堀カルタ活動宣言が提出された。
「西堀カルタ」のフランス語訳とポルトガル語訳が提出された。
第18回社会・経済システム学会で「西堀カルタの光をあてて」を发表した。
第63回QC研究会で「読むと元気が出てくる西堀カルタ」を发表した。
「西堀カルタ」のスペイン語訳が提出された。
「西堀カルタ カレンダー2000」の2000部を製作して、配布した。
- 2000年 ペルー人研修生に西堀カルタの説明をして、アンケートを受領した。
「西堀カルタ」のタイ語訳が提出された。
「西堀カルタ」のオランダ語訳がオランダから送られてきた。
東京情報大学で、「仕事とモチベーション「西堀カルタ」を読む」が講義された。
第44回ヨーロッパ品質会議 (44th EOQ 2000 Budapest) で、「西堀カルタの展開」"The Development of NISHIBORI MAXIMS"を发表した。
大阪経済大学で、「西堀カルタの展開について」講義した。
西堀カルタ解説の日本語版と英語版を完成した。
「西堀カルタ カレンダー2001」の2001部を製作して、配布した。
- 2001年 「西堀カルタ」の絵札・字札を作った。
第300回モチベーション研究会の懇親会で「西堀カルタ」によるカルタ取りをした。
これをもって西堀カルタ分科会の役割は概ね終わる。
西堀榮三郎記念 探検の殿堂会館 7周年記念研修・講演の前段3講演を行い、「現代を生きるために！」の5回継続の研修・講演会の支援を行った。
東京情報大学での「西堀カルタ」を用いた講義を実施。これは来年も続く予定。
「西堀カルタ カレンダー2002」はインドネシア要望の60部+60部を手製で作る。
「西堀カルタ」分科会の任務終わり、「信頼と管理」分科会に引き継ぐ。

⁶ 「春秋」は以下の文章で始まります——二十三年ぶりのマイナス成長という九七年度も今日で終わり。政財界から学校まで、自信や元気が消えうせた一年だった。心機一転、明日から九八年度。登山家で品質管理の専門家、故西堀榮三郎さんの「西堀カルタ」を紹介しよう。新年度向きの積極思想に満ちている。



不許複製 著作権保有者:財団法人 日本規格協会 お問い合わせ窓口:(財)日本規格協会 関西支部 吉田(06 6261 8086)

い 石橋をたたけば渡れない

チャンスは逃がすな。まず決断せよ、石橋をたたくのは（問題の詳細の検討は）それからである。

First decide to leap, then look.

Don't miss the chance. Decide, then examine. If you examine first, you easily miss the chance and can not succeed.

ろ ロジックとノンロジックの組み合わせ

問題解決（一仕事）は通常理詰め、合理的判断を積重ねて行うのが定石だが、非常に難しい問題では定石を越えた判断、インスピレーションが必要なことがある。

Logical judgements and inspiration go hand in hand.

It is common for problem solving to pile up logical judgements. However, when problems are too difficult to solve only by

piling up logical judgements, inspiration is often required in addition to logical planning.

は 馬鹿と大物が新しいものを作る

新しいものを作るには、新しいことをするには、そのことに執念を持つ人（馬鹿）と、その人を支える大物が必要である

A single-minded person and a visionary big boss create new things.

New things are created by the combination of two kinds of persons; one is a single-minded person who devotes himself to it and the other is a visionary big boss who supports him.

に 忍術でもええで

「目的は絶対、手段は自由」カルタと表裏一体をなすもの。（人倫に立つ限り）目的を達成するための手段は各人の自由に任せる、個性を認めるということ。

Any method will do so long as it leads you to the objective.

This is another expression of “The objective is absolute, the method is free.” Any method leading you to the objective may be allowed so long as it is not immoral.

ほ ポジティブ・フィードバックで調子にのせよ

人材を育てる方法はただ一つ、仕事をさせ成功させることである。成功経験が人を育てる、さらに大きな仕事をさせる、…。人と仕事の美しい循環を成立させることである。

Raise people through positive feedback.

There is one and only way to raise your people. It is to make them tackle a pioneer work and succeed in it. The success experience makes them bigger. Then you make them tackle a more difficult work and succeed in it, ... Thus the beautiful circulation between people and works comes into being, people are being raised.

へ 平常心 会社を守り 身を守る

非常の時も平常心を失わなければ的確に対処でき、会社を守り身を守ることが出来る。

Remaining calm keep up yourself and your company.

If you keep yourself and remain calm in an emergency, you can properly cope with it, and keep up yourself and your company.

と 統計的方法で事実をつかめ

実験室と違って工場ではいろいろな因子の影響で、問題が起こってもなかなか原因が分からない。このような場合真の原因（因果関係）を把握するのにもっとも適した方法は統計的方法、統計的判断である。

Find true cause with statistical methods.

Different from scientific laboratory, it is often difficult to find out true cause of troubles in a factory on account of many factors complicated with each other. One of the best ways is to apply statistical methods and judgements, through which true cause comes to be clear.

ち チャンスを与えよ 良い部下に

人に対する最大の贈り物はその人にチャンスを与えることである。部下にチャンスを与えよ、そして成功させよ。

You should positively provide opportunities for your people.

The best gift to a person is to provide him with an opportunity. Give opportunities to your subordinates and make them succeed.

り リーチングアウトの精神で行動する

チームで一仕事をするときもっとも大切なことは異質の協力である。チームメンバーは互いに手を差し伸べる気持ちで有機的に補完しあい目的達成に努めねばならない。（リーチングアウト：援助の手を差し伸べること）

Reach out each other to achieve the objective.

The most important thing for a team to achieve the objective is cooperation of different natures. Every member should reach out to the others so that their team may achieve the objective.

ぬ 抜け駆けの功名では困難は乗り切れない

チームワークの要件は目的に対する共感、誇りと恥（功名心）の意識である。過度の功名心、功名の独り占め意識はチームワーク（連帯意識）の大敵である。抜け駆けの功名では困難な仕事は達成できない。

Stealing a march upon teammates brings little effect on tiding over the difficulties.

The essence of teamwork is sympathy for the objective and sense of pride and shame. People who are eager for fame and try to steal a march on their teammates are a threat to teamwork (cooperative effort by a team). No team with such members can overcome the troubles and achieve the objective.

る ルールは自主能力で変わるもの

例えば現場作業である。ルール（作業標準）はそれを使う人のスキルによって変わるもので、ベテランと新人では当然違わねばならない。

The rule should be modified depending on people's ability.

Take manufacturing operations in a factory for instance. Rule (operation manual) should be fit for skill of workers. The manual shall be different between skilled and unskilled workers.

を おのれだけでは何もできない

一人で出来る仕事は限界がある。大きな仕事、価値のある仕事は自分一人では出来ない。

One person alone can't create anything.

However able he may be, the work that one person can achieve has its own limit. No person can accomplish a great and worthy work only by himself.

わ 若いときの夢はかなえられる

少年の夢は美しい。少年が夢を捨てず持ちつづけ努力を続ければやがては実現する。

The time will come when dream of a youth will come true.

A boy's dream is beautiful. Supposing he continues to hold it in mind and to make efforts for it, the time will come when his dream will be realized.

か 感謝がすべてのモチベーション

人をやる気にさせるものとして報酬、地位、名誉...いろいろなものがある。しかしその最終最大のもの、人がことを為すに当たってその最大の動機となるものは、その成功を願っている人の喜び、感謝である。

Genuine gratitude is the greatest motivation.

Rewards, status, honor and so on, there are many things to motivate us. Among them the final and greatest motive to drive us for successful work is the joy and gratitude of the people who strongly wish our success.

よ よい品質は作る人間の込めた魂

作る人は良い製品、人に喜んでもらえる製品を作る為に魂を込める。よい品質は造る人の魂の証である。

High quality is the emblem of the spirit of the manufacturer.

A manufacturer is putting his/her spirit to make products with high quality in order that customers may use them with pleasure. High quality is the emblem of his/her spirit

た 体験で生きた知識を

知識は知識である。それだけでは使えない。体験して生きた知識、真の知識を身に付けよう。

Acquire true knowledge through experiences.

Knowledge is knowledge, you cannot use it until you have mastered it through experience. Acquire true knowledge through experiences and practices.



① レボリューションをやった日本のQC

戦後日本は品質を管理するやり方に対してレボリューション（革命）を行った。アメリカはエボリューション（発展）しかなかった。日本の工業製品は飛躍的に品質が良くなった。

Japan has achieved quality revolution.

Japan has completely revolutionized its ways of controlling and improving product quality after World War II. USA has only evolved them. Quality of Japanese products has been remarkably improved.

② 創造で会社の繁栄、自分の生きがい

創造性は人間の本能である。日常の仕事で創造性を発揮する／発揮できるようにする。この事は本人の生きがいとなるのみならず会社の繁栄に貢献する。

Creativity brings prosperity to a company and worthwhile life to people.

Creativity is one of the human nature. Production system should be improved so that the manufacturers may demonstrate creativity in their daily work. This improvement will not only give the people the pleasure in their work but also bring prosperity to their company.

つ つまらぬことにこだわるな

Don't stick to trifles.

ね ねらいの品質トップがきめる

製品は会社の命である。ねらいの品質をどう定めるかは最大の経営問題である。最高経営者が決めねばならない。

Top management shall decide the quality of design.

Product quality is the very essence of the company. Decision of quality of design is the top management task. Top management shall decide it.

な なんでもやろうパイオニア精神

新しいことを知りたい、珍しい経験をしたいというのは人間の本性である。人生を実り豊にするためにパイオニア精神を持って未知へ挑戦しよう。

Do everything in "a pioneer spirit".

It is human nature to wish to know new things and to have new experiences. Let us challenge the unknown in a pioneer spirit so that we may make our life fruitful.

ら ラインもスタッフも心を合わせて目的達成

第一線で製造に従事する人（ライン）も、製品を検査する人（スタッフ）も一緒になって良い製品を作ろう、目的を達成しよう。

Unite the efforts of the line and the staff to achieve the objective.

You, a worker, an inspector or an engineering staff, cooperate each other to produce quality product and to achieve the objective.

む 虫の知らせが聞こえるまでに

ある事に強い関心を持っていると感性が鋭くなり、普通では気の付かない微兆（虫の知らせ）に感じ対応出来るようになる。事を為そうと思えばこの微兆を感じるころまで打ち込まねばならない。

Devote yourself to your work and you will come to perceive the faintest symptom.

If you are strongly interested in something, you will become very sensible, and come to perceive the faintest symptom that nobody does, and you will be able to provide proper means. If you want to achieve something, you should devote yourself to it until you can perceive inspiration.

う 上役よ幅役になれ

上司は幅のある人であるべきである。上役たるもの重役（権力のある人）より幅役（幅のある人）を目指せ。（西堀さんは「上役より幅役になれ」ともいった）

Higher-ups, become a man of broadness rather than a man of status.

Higher-ups should have a broad mind and a broad knowledge. They should not seek for the highness of status with power, but for the broadness of mind and knowledge.

お 異質の協力でチームワーク

異質の協力は同質の協力より強力である。異質の協力でチームワーク（チームで行う一仕事）を成し遂げよう。

Achieve a teamwork through cooperation of different natures.

Cooperation of different natures is much stronger than that of similar natures. Carry out a pioneer work of team through cooperative efforts of different natures.

の 能力は変えられる

個性は変えられない、能力は変えられる。

The ability can be improved.

Individuality cannot be changed, but the ability can be changed.

お 思いもよらぬことは起こると思え

事を為すに当たっては（出来る限り準備するとともに）、思いもよらぬことは起こると覚悟して臨め。

Expect the unexpected.

When we start a pioneer work, we should prepare everything as well as possible. And moreover we must take it to heart that something unexpected should occur.

く 苦のあとの成功

成功への道は平坦ではない。途中思いもよらぬ難所がある。苦しんで乗り切って初めて仕事は成功する。

No pain, no gain.

The road to success is not flat. It is quite common that we will meet serious troubles on the way. We will succeed only after we have overcome every difficulty.

や やらされていると思わずやっていると思え

自分の仕事が小さな歯車の一つに見えても、仕事の目的に強い共感を感じるとき、貴方は仕事をやらされているのではない、他と協同で仕事をやっているのである。やらされていると思えば仕事は苦役で、やっていると思えばそれはハンティングのように楽しいものである。

Don't think you are forced to work, but think you are working of your own will.

Even if your job seems a small part of the wheel gear, when you feel strong sympathy with the final purpose of your job, you feel that you are not forced to work, but are working together with others. When you think you are forced to, your job is toilsome. When you think you are working of your own will, it becomes pleasant like hunting.

ま まず誉めよ

やる気にさせるには先ず誉めることである。

Start with praise.

When you want to motivate your subordinates, start from praising them.

け 欠点を長所に替えて育てよう

欠点の中には矯（た）めようと思っても矯めることの出来ないものがある。これを個性という。部下の個性を認め個性が発揮できる環境を作ってやろう。個性を生かすことは本人にも会社にもプラスとなる。

Turn your people's faults into merits.

Some of the faults of people cannot be corrected. They are called individuality. Accept individuality of your people and arrange the circumstances so that they can make good use of their individualities. Your efforts will surely bring happiness both to them and to the company.

ふ 不良の山は宝の山

不良が多いと嘆いてはならない。不良の山は宝の山である。QC を徹底すれば不良はそのまま利益となる。

Heap of defectives is as much treasure.

There is no need to worry that a lot of defective products are being manufactured. Heap of them is as much treasure. When you apply QC techniques thoroughly, defectives will directly turn into profits.



こ 向上心があれば飽きることがない

人にとって最も恐ろしいのは惰性で日を送ることである。向上心があれば飽きることがない。仕事／生活の中に向上の道を残さねばならない、向上を求めねばならない。

Where there is aspiration, there is no boredom.

It is the most horrible for us to live in a boring life. If only we desire to improve ourselves, we would never be bored with life. We must leave a room to improve ourselves in daily life /in our daily work, and should seek to improve ourselves.

え エゴはモチベーションの敵

身勝手な振る舞いはチームのやる気を失わせる、モチベーションの敵である。

Selfishness is the enemy of motivation.

Your selfish behavior deprives others of their will toward team objective. It is the enemy of motivation.

て 出る杭をのばせ

出る杭を打つな、手を添えて伸ばしてやれ。

Encourage those who are distinguishing themselves.

You, higher-ups, worthy of the name, never suppress your subordinates who are distinguishing themselves. Reach out your hand to grow him up.

あ 「ああ、そりゃいい考えだ」

「君の考えはすばらしい。一つものにしようではないか」

“Hay, good idea!”

“Your idea is excellent. Why don’t you try it? I am ready to help you.”

さ 境を作る専門馬鹿

専門家と言われる人は権威を守るために境を設けたがる、垣根を作って異質の協力を妨げる。

A specialist is narrow-minded to install boundaries.

He who is considered as a specialist prefers to install boundaries to keep his authority, and builds barriers, which prevents cooperation of different natures.

き 競争ではなく競走を

キョウソウは人を成長させる。しかしこのキョウソウは相手をやっつける競争でなく努力の成果が優劣となる競走でありたい。

Compete just as a race, not as a wrestling.

Competition helps us to grow up. But we should not compete in such a manner as a wrestling in which one makes the others yield to him, but as a marathon-race in which every runner competes with others in each efforts.

ゆ 勇気を持って挑戦を

新しいことをするのは恐ろしい。勇気を奮い起こして挑戦しよう。

Call up the courage to face any challenge.

We feel anxious when we start a new thing. Call up the courage to challenge it.

め 迷信は早とちりから生まれる

会社にはいろいろな迷信—事実でない技術情報—がある。これはデータを検証せず偶然の効果をそのまま鵜呑みにした現場の早とちりから生まれたものである。

Superstition often results from shallow reasoning.

There are always many superstitions (incorrect technical information) in the factory. These technical superstitions come from our hasty conclusions that we have considered the chance effect as the true one without sufficient statistical testing.

み みんなでやろう前印きに

仕事をする、目的に向かって協力する、このとき人は（職位にかかわらず）皆同志である。一人一人力を出し合って目的達成のために頑張ろう。

Let all of us make efforts positively to achieve our objective.

When we are working and cooperating towards our objective, we are all comrades regardless of the status. Let us cooperate and work together to achieve the objective.

し 人生は実験なり

人生の意義は未知への挑戦にある。

Life is a series of challenges.

The significance of our lives exists in challenging to the unknown.

ゑ 絵だけの管理は困りもの

心のこもらぬ形式的管理は問題が多い、困ったものだ。

Hands-off management creates distress.

Superficial management without heart and soul involves many problems. It is a matter for distress.

ひ 人に喜ばれることは善である

人に喜ばれること、子々孫々に喜んでもらえることは善、人に迷惑をかけること、子々孫々の迷惑となることは悪である。

Delighting others is good.

What delights others especially our posterity is good, what gives trouble to others especially to our posterity is evil.

も 目的は絶対、手段は自由

目的に共鳴するとき、そしてそれが善を志向するとき、目的は絶対となる。しかしそのやり方は（自他の迷惑にならぬ限り）個人の個性にあったやり方、個人にとってもっとも自信の持てるやり方でやるべき／やらずべきである、やり方を強制してはならない。

The objective is absolute; the method is free.

When you feel sympathy with the team objective, and when it is aiming good, then the objective becomes absolute. But it is/ must be within your discretion what method you may adopt so long as it brings no trouble to you and others. The method should not be forced.

せ 責任は事の起こる前に負うもの

事の起こる前に責任を負うとはどういうことか、「何としてでも与えられた目的を達成しよう」と覚悟を決めることである。この覚悟が準備を万全なものにし「思いも及ばぬこと」に対処する平常心を養う。

Take responsibilities before matters occur.

What does “Take responsibilities before matters occur.” mean? It means, “To make up your mind to achieve the objective by all means.” This resolution makes preparation perfect and nourishes a calm mind to deal with well anything unexpected.

す すなおに事実にもとづいて

現場の問題を解決するにはすなおに事実にもとづいて考えること、すなわち先入観を持たずに事実を観察し、仮説を立て、検証することである。

Start from the facts without preconception.

In order to solve problems in a factory, we ought to learn from the facts, that is, we ought to observe facts without preconception, frame a hypothesis and test it.

ん 「ん」まで結論しっかりと

最後の結論が得られるまで努力を惜しんではならない。

Never leave conclusion unfinished.

You should not spare your efforts until you have come to the true conclusion.